

は じ め に

昨年は、わが国自由民権運動(いわゆる激化事件)の100周年に当り、11月、早稲田大学において「自由民権と現代」を基本テーマに盛大な全国集会在開催されたことは、まだわれわれの記憶に新しい。そして、また、今評判のNHK大河ドラマ「春の波濤」のプロローグでは有名な「板垣死すとも自由は死せず」の名句を残した板垣退助の遭難事件や民権運動が取り上げられ、人びとのそれへの関心をいっそう高めている。

このような時期に、岐阜県の自由民権をテーマにした当地域経済研究所の研究特集号を上梓できることは誠に喜ばしい。

当研究所が2年前からこのテーマに取り組み始めたのは、もちろん単なる偶然ではなく、上述のような、わが国自由民権運動の今日的意義を考えてのことであるが、さらに岐阜県の自由民権についての研究が、他に比べて少ないことの認識に立つものであった。

今回、協力いただいた方がたの9編の論文を拝見するとき、岐阜県の自由民権運動とその時代の多面的な研究と分析という当初のわれわれの目的が十分に達成されていることを知り、大きな喜びを感じるとともに、深い感謝の念を禁じえないのである。とくに、学外の後藤 靖・松田之利・村上 貢・佐藤政憲の諸先生方には、御多忙なか、2年間にわたり貴重な時間をおさきいただいたことに心から御礼申し上げる次第である。

ひるがえってみると、明治10年代の自由民権運動は、板垣襲撃が象徴するように、やがて弾圧され、その後は度重なる戦争の時代が続く。そして第二次世界大戦の破局ののち、それは日の目をみる。戦後の自由と民主々義は皆が知るように数千方の尊い同胞の血によってあがなわれたものであった。

歴史は繰り返すといわれる。今、世界の各所で行われている血なまぐさい戦争や軍拡競争をみると、いつそれらの火の粉がわれわれの頭上にふりかかり、またぞろ、暗いものいえぬ時代に逆行することがないとはいえぬ。

このように考えると、この研究はささやかなものではあるが、そのもつ意義は決して小さくはないと自負するのである。

ところで、当研究所が発足して満4年、その前身である地域経済研究会の発足から数えると、早や8年がたとうとしている。次の総合研究成果の発表は2年後であるが、その年(昭和62年)はたまたま本学設立の20周年に当る。新しい構想のもと、地域研究のいっそうの成果を期す考えである。

岐阜経済大学地域経済研究所
所 長 大 迫 輝 通